九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

いとやむごとなききはにはあらぬが ： 教科書の源氏物語

田村, 隆
九州大学専門研究員

https://doi.org/10.15017/13176

出版情報：語文研究. 104, pp.1-17, 2007-12-21. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

いとやむごとなききはにはあらぬが

――教科書の源氏物語――

田村　隆

高等学校で『源氏物語』を学ぶのは二年次か三年次であることが多いという。若紫巻の垣間見の場面と並んで、多くの教科書に採録されているのは桐壺巻の冒頭である。(注1) そのうちの一冊を掲げる。

いづれの御時にか、女御・更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなききはにはあらぬが☆、すぐれて時めき給ふありけり。

（『高等学校　古典　古文編』第一学習社、平成十七年）

文中の「が」には星印が付され、次のような練習問題が脚注欄に示されている。

問　「が」の意味は何か。

他の教科書もいくつか見てみよう。

問　「あらぬが」の「が」の文法上の働きは何か。

（『古典』筑摩書房、平成十七年）

「いとやむごとなき際にはあらぬ」と「すぐれて時めきたまふ」とは、どのような関係にあるか。

（『高等学校　古典』旺文社、平成十七年）

「あらぬが」の「が」の用法に注意。

（『物語文学選』日栄社、平成十七年）

周知の如く、これらの問いかけはいずれも「同格の格助詞で、「あらぬが」は「〜ではない人で」と訳す」という答えを期待したものである。中でも、「どのような関係にあるか」といった問い方は、いかにもその「正解」を前提にしているように見える。

その他にも、本文の脚注に「たいして重んじられる身分の家柄ではない女性で」（『古典　古文編』東京書籍、平成十七年）と触れられるものや、傍訳の形で「それほど高貴な身分ではない方で」（『新編古典』大修館書店、平成十七年）と付されているものもあり、大方の教科書が何らかの形でこの「が」に言及している。(注2) このような同格の「が」の指導は、高等学校で桐壺巻を扱う際の決まり事のようになっている。

生徒からの「なぜ接続助詞ではいけないのか」という質問に対しては、例えば次のような副教材の文法書を用いて、

「が」はもともと格助詞で、それが転じて接続助詞になったものである。転じたのは平安時代末期以後である。したがって平安中期（『源氏物語』『枕草子』の時代）までの「が」は、一見接続助詞のように見えるものであっても、主語を示す格助詞として解釈すべきである。

（日栄社編集所編『新・要説文語文法　改訂版』日栄社、平成四年）

の如く、『源氏物語』の時代にはいまだ接続助詞の「が」はないことが説明される。そのような授業風景の一コマは、およそ次に掲げる記録からもうかがい知れるであろう。

「が」の文法説明として「同格を表す格助詞」と答えられる人はほとんどいない。たいていの人が、「逆接を表す接続助詞」と答えてしまうんです。気持ちはわかります。……ところが、この時代に接続助詞の「が」はないんです。平安の「が」は格助詞。これは基本の基本です。接続助詞の「が」ができるのは、平安末期。だから入試レベルでは、〝中世から〟と覚えておいてさしつかえありません。……この例だけは、皆さん必ず覚えておいてください。

（『望月古典文法講義の実況中継（上）』語学春秋社、平成十七年）

また、『土屋の古文100』（ライオン社、平成八年）においても、「「が」は接続助詞のように見えるが、格助詞で同格にとるのが普通である」と注意を促した上で、囲み記事で「平安

時代の「が」は格助詞である」と掲げている。右に掲げた参考書がいずれも「一見接続助詞のように見える」点を指摘している事実は、この「が」がいかにも練習問題向きであることを物語る。

この箇所の文法は、随分前から授業の折に取り上げられていたとおぼしい。手元にある日本古典全書の第五版（昭和二十九年刊）には所々に旧蔵者の書き入れがあるが、「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり」の「あらぬが」の「あらぬ」と「が」の間に鉛筆で「人（主格）」と記され、「給ふありけり」のうち、「給ふ」と「ありけり」の間にも「方」と記されている。書き入れが桐壺巻の途中までしか存しないことから見ても、おそらくは古典全書本をテキストにどこかで講義された「同格」の説明を書き留めたものであろう。

「が」の練習問題に際して、教室では「同格の格助詞」としてあたかも古今ゆるぎのない解釈であるかに説かれるが、もしこれを正解とするならば、実は「誤答」の歴史、すなわち「逆接の接続助詞」として理解してきた歴史の方が圧倒的に長いことはとかく見過ごされがちではあるまいか。本稿はこの「が」の品詞が格助詞か接続助詞かを改めて考察するものではない。「誤答」の歴史、そしてこの箇所が格好の練習問題として教科書に登場した背景を素描してみようとするものである。

二

桐壺巻冒頭の「が」は接続助詞ではないという説は、昭和初期から散見される。松尾捨治郎『国文法概論』（中文館書店、昭和八年）はこの箇所について、

> 此等を初心の人は「連体形の下にあるから、副詞句を作る為のもので、どもとほぼ同意である」と誤解し易いが、決してさうではない。何れも、其が・人が・の意であつて主語たることを特示する助詞である。

として主語に解すべきことを論じ、また吉澤義則『対校源氏物語新釈』（平凡社、昭和十二年）は、文法的な説明は特にないものの、頭注において、

> さう高貴な身分ではなくて而も羽振のよい。

と、同格の意に訳している。

そして、同格の「が」とする説を決定づけたのは石垣謙二「主格「が」助詞より接続「が」助詞へ（上・下）」（『国語と国文学』昭和十九年三・五月）である。この説は昭和三十年に上梓された氏の遺著『助詞の歴史的研究』（岩波書店）によって一層広まった。

さて右の如き「が」助詞は「の」助詞と同様の職能を以て形状性名詞句を構成するものであるが、「が」助詞と主格との関係が余りに密接である為に、どうしても「が」を見れば直ちに主述関係を連想し、先づ述定を意識して装定を意識する事を妨げるのである。然し「が」は右の場合「の」の同格的用法を代行してゐるもので主格助詞ではないのであるから、単に主語と述語とを結合する述定関係と見做す事も亦不可能である。茲に於て此の矛盾を両立させる為に、同格的であつて而も述定に与る「が」助詞といふものが冥々の間に形成せられる事となるのである。

この箇所をめぐる文法解釈については近時、小林賢次・梅林博人『日本語史探究法』第五章（シリーズ〈日本語探究法〉八、朝倉書店、平成十七年）に石垣論文以降の見解を含めてまとめられたので、助詞「が」の研究史自体には今は立ち入らないが、[注3] これらの成果をふまえ、現行の校注書や口語訳では概ね同格の「が」に解するに至った。[注4] 教科書の記述も無論その流れに沿ったものである。

だが、率直に言って「同格の格助詞」とするこの解釈は必ずしも定着しているとは言い難い。例えば、瀬戸内寂聴訳（講談社、平成八年）においても、

それほど高貴な家柄の御出身ではないのに、

のように逆接の「が」として訳されている。また、橋本治『窯変源氏物語』（中央公論社、平成三年）も、

そう上等という身分ではないが、

と訳している。

また、訳された時期は古いが現在も角川文庫などで手軽に読めるものとして、与謝野晶子の訳があるが、彼女も逆接に解している。そのことは、田中貴子『古典がもっと好きになる』（岩波ジュニア新書、平成十六年）に指摘されており、氏は晶子の、

最上の貴族出身ではないが、深い御寵愛を得ている人があった。

という訳を挙げ、「が」を逆接の意に解していることについて、

『源氏』訳で有名なのは与謝野晶子訳ですが、彼女はしかるべき国文学者に頼らなかったのでしょう、一つ間違いを犯しています。

と述べている。晶子は明治四十五年『新訳源氏物語』と、昭和十三年の『新々訳源氏物語』（現在読まれているのはほとんどがこちらの訳である）の二度、『源氏物語』を訳しているが、前者は抄訳であり、「が」の解釈には直接関わらない。田中氏が挙げているのは後者の訳である。ただし、「しかるべき国文学者に頼らなかった」ことは、逆接に訳したことの直接の原因にはなるまい。なぜなら、現在のように「同格の格助詞」と解する説が本格的に登場するのは、晶子の訳よりももう少し後のことで、当時はいまだ逆接の訳が主流であったからである。また氏は、「晶子以後の現代語訳では、ちゃんと訳されています」とも述べるが、先に見たように晶子以後も少数ながら逆接の訳は散見される。

そして、口語訳に加え、逆接の解釈は桐壺巻の梗概や紹介といった類の文章に多い。高校生にも人気のある、大和和紀『あさきゆめみし』（講談社、平成十三年）の「人物紹介」においても、「桐壺の更衣」は、

源氏の母。低い身分で入内するも、帝の寵（ちょう）を独占。そのため帝をとりまく女人に恨まれる。

と紹介される。この「低い身分で入内するも」という表現もやはり逆接のイメージが背景にあるように思われる。角川書店の「ビギナーズ・クラシックス」（平成十三年）の梗概でも、

女御より下位の更衣だが、

と紹介されている。また、叢書「人物で読む源氏物語」所収の『光源氏Ⅰ』（勉誠出版、平成十七年）にある「あらすじで読む光源氏」でも、

寵愛を一身に集めていたのは、家柄がそれほど高くはなかったが、たいそう美しく優しげな桐壺の更衣という方

であった。

と記され、最近のものでは、来年（二〇〇八年）の「源氏物語千年紀」を前に京都府のホームページに掲載されている桐壺巻の梗概においても、

いずれの御代であったか、女御（にょうご）・更衣（こういう）といった大勢のお妃たちの中にさほど高貴な家柄ではないが、帝のご寵愛のきわめて深い桐壺の更衣という方があった。他のお妃たちの嫉妬を買い、いろいろな嫌がらせを受ける。

の如く、ほぼ忠実に訳しながらも問題の箇所は逆接である。これらの例は枚挙に遑がない。

そうした中、一冊の本の中に「同格」の解釈と「逆接」の解釈が混在するというねじれ現象も数多く見出される。『週刊ビジュアル源氏物語』（デアゴスティーニ、平成十四年一月）でも、語釈にあたる「ことばの解き明かし」では、「それほど高い身分ではない方で」としながら、すぐ下に記された口語訳「今様がたり」では、「たいした身分でもないのに」と記している。こういった環境は、逆接のイメージ形成に大きく影響していよう。古くは、池田亀鑑『新講源氏物語』（昭和三十二年）の梗概に、「更衣という身分は高い身分ではなかつたが」とありながら、本文の頭注には「歴とした重い地位（皇后をさす）ではないお方で」とする例もある。(注5)

そもそも、この冒頭場面で提出される問題は、

帝の寵愛を一身にあつめる女性が、皮肉にも身分の低い女性であるという不調和が、この物語の明白な大前提であり、この不調和の解決に、物語の進行が賭けられている。

（今井源衛『源氏物語（上）』創元社、昭和三十二年）

と説かれるように、「身分」と「寵愛」との「不調和」であった。物語全体を見渡せばおのずと逆接であることの意味が浮かび上がってくるという構造を持っているとも言えよう。各種の梗概ではこの不調和をより明確に読者に意識させるべく、逆接の表現を用いて俯瞰的に説明しているということになろうが、我々が何気なく受け入れているこの「梗概」は、結果として『源氏物語』本文を忠実に訳したものとはならなかった。逆接の訳に加えてこのような逆接の梗概の流布によって、教室とは別の場所で逆接のイメージが次第に膨らんでゆく。(注6)

三

それを象徴する興味深い現象を紹介する。先日、大学生を中心に三十五人に対し、簡単なアンケートを試みた。この箇所の口語訳として、

それほど身分の高い人□、大層御寵愛を受けておられる方がいた。

という文章を提示し、空欄にあてはまる訳語を尋ねたところ、「ではないけれど」のように逆接に訳す回答が二十六人に見られた。高等学校で桐壺巻を習っていても、依然として逆接のイメージは根強いようである。ただ、このこと自体は上述の事情を考えればさほど驚くことではない。だが、意外に思われたのは、

いとやむごとなき際にはあら**ぬが**、すぐれて時めき給ふありけり。
いとやむごとなき際にはあら**ねど**、すぐれて時めき給ふありけり。

の二文を示してどちらの形が実際の『源氏物語』本文だと思うか、という質問に際し、三十五人のうち二十五人もが後者の「あらねど」を選んだことである。コメントには、

「高校で試験に出されるほど大切な箇所だという印象があります。」
「あまり授業で詳しくやってはいないと思います。」
「「ぬが」だと耽美さがダウンする。」
「教科書でならったときに、「ねど」だった気がした。」

などが寄せられた。

しかし、現行の教科書をすべて見渡しても、また『源氏物語大成』校異篇および各種の板本類を見ても、「あらねど」の本文を持つ伝本は全く見当たらない。「「ねど」だった気がした」というのは記憶違いであったと考える他はあるまい。「いとやむごとなき際にはあらねど」という本文は、『源氏物語』の本文としては存在しないのである。逆接のイメージが記憶の本文をも改変させてしまっている。また、試みにインターネット上で「際にはあらねど」という文字列を検索してみると、この本文で『源氏物語』冒頭を記憶しているとおぼしい例が数十件見出せる。教科書などに「世界の古典」

（『高等学校　改訂版新訂国語二』第一学習社）、「日本文学の最高傑作」（『古典Ⅱ』教育出版）、「陰影に富んだ流麗な文体」（『最新国語便覧』浜島書店）とも評される『源氏物語』が冒頭の一文から記憶の中で改変を蒙るとは皮肉なことであるが、この事例は逆接の解釈の根強さを如実に示していよう。

だが、そのような「記憶違い」を一概に責めることはできないと私は考える。それは先に「『源氏物語』本文としては」と断ったことと関わるのだが、その理由を以下にいくつかの事例を交えて紹介したい。

明治四十四年、尾上登良子『源氏物語大意』（大同館、明治四十四年）という梗概書が刊行された。[注7]『源氏物語』を初学者向けにリライトしたものであるが、原文に比較的忠実に沿っている。桐壺巻冒頭の一文を掲げよう。

いづれの天皇の御時なりけむ。女御更衣、数多候ひ給ひけるが中に、いと尊なき身分にはあらねど、天皇の御覚、ことにめでたき更衣ありけり。

「御時」の前に「天皇の」を補い、「ありけり」の前に「更衣」を補うなど、随所に教育的配慮が窺えるが、とりわけ今問題としている箇所が「身分にはあらねど」となっている点は注目される。現在でも多くの人が誤って覚えている形そのものである。

類似の言い回しは、他の梗概書や教科書の類にもいくつか見受けられる。

いと尊き身分にはあらねと

（増田于信訳『新編紫史』誠之堂、明治二十一年）

しかく尊き身分ならねど

（長連恒『源氏物語梗概』新潮社、明治三十九年）

このように、梗概書の世界においては、「が」ではなく、むしろ「あらねど」に近い表現が主流であったらしい。「青空文庫」など各種のデータベースによって明治の小説類を検索してみても、「あらねど」の使用頻度は「あらぬが」よりも圧倒的に多い。当時の文章において逆接の表現は、「あらぬが」よりも「あらねど」の方が自然だという意識があったのだろう。試みに「日本古典文学大系」のデータベースで「あらぬが」と「あらねど」の総数を調べてみると、やはり「あらねど」の方が圧倒的に多い。また、『源氏物語』の中に、「にはあらぬが」という文字列はこの一例しか見られないの

に対し、一方の「にはあらねど」は四十例を数える。それを勘案すれば、もし紫式部がこの箇所を逆接のつもりで考えていたならば、きっと「あらねど」に近い表現を用いていたであろう。文脈は異なるが、あるいは『紫式部日記』の赤染衛門を批評するくだりの、

丹波の守の北の方をば、宮・殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひ侍。ことにやんごとなきほどならねど、まことにゆへ〳〵しく、……

のような表現になっていたかもしれない。少なくとも、逆接の意ならば「あらぬが」とは記さなかったのではあるまいか。その意味において、アンケートにあった「「ぬが」だと耽美さがダウンする」というコメントは直感的にこの事情を捉えているようで、大変興味深い。

四

「あらぬが」を「あらねど」の如くより明確な逆接の表現で訳出する事例を少しずつ遡ってみたい。近世期に広く読まれた『湖月抄』を確認すると、頭注に「桐壺更衣は大納言の女なれば、大臣の女などのやうに、きはめて上臈の分際にはあらぬがと也」とあり、逆接として解釈していたと思われる。『源氏物語』の諸注釈にはこの箇所に言及するものはほとんどないが、近世期には俗言を用いて綴られた『源氏物語』の梗概書が刊行された。いわば江戸時代語訳とも言うべき書物であり、この箇所の解釈を垣間見ることが出来る。その一つ、都の錦の手に成る『風流源氏』（元禄十六年刊）には、

いとやんごとなき位ならねど按察大納言のむすめ、桐壺の更衣と申は、すぐれて時めく花のかほ二八の春の明ぼのや、霞は黛おのづから、その身に薫せざれども色もにほひもほのめきて、風にしなへる柳ごし、膚さながら痩もせず……

とあり、(注8)「あらぬが」を明治の梗概書に近い形で表現している。それから、享保八年刊の多賀半七『紫文蜑の囀』でもやはり原文よりも明確な逆接の表現を用いて綴っている。

さのみお里の品たかき御分際にはおはせぬが、すぐれて帝の御気に入り、時めきはのきゝ給ふ更衣おはしましけり。

「おはしましけり」の主語として「更衣」と明示していることからも、「おはせぬが」の「が」は逆接の接続助詞のつもりであろう。[注9] 他の場面においても、

姫君は源氏の君よりは、四つばかり御年かさにておはしますが、源氏の君のいとうわかうおはしますも、似つかはしからぬ物にておぼしてにや、

紀伊守うけたまはり皆下の屋へおりよと申しつけはべりぬるが、まだかれこれといたしえおりあへ申さで、

といった逆接の「が」の例を拾うことができる。

上述のような梗概書の外、『源氏物語』に範を仰いだ文章も当然ながらこの解釈の影響下にあった。例えば荒木田麗女は多くの擬古物語を著したが、そのうちの一つ『桐葉』（明和八年成立）は、

梅壺こそはなやかに時めき給ふなれ、玉のおのこ御子さへひかり出給へるめでたさよ。（三下）

の如く『源氏物語』に近い表現がいくつも見られる。そして、その中に、

桐壺の更衣は宰相なる人の女なりしかど、けぢかきあいきやうなどもこよなしと、御心とゞめ給ひしに、はやう失給へるぞ口おしうおぼされき。（同）

という一節がある。[注10] 「宰相」とは「参議」の謂であり、この「桐壺の更衣」もまた、「いとやむごとなききは」ではなかった。そのことが「なりしかど」と明確な逆接の表現で語られている。[注11]

「あらぬが」から「あらねど」へという本文の改変を伴った逆接のイメージ形成の例は、鎌倉時代成立の『増鏡』（巻十三、秋のみ山）にも見られる。文保二年に起きた後醍醐天皇の寵姫大納言典侍と堀川具親との恋愛事件をめぐる記事である。

内には、万里小路大納言入道師重といひし女、大納言の典侍とて、いみじう時めく人あるを、堀川の春宮権大夫具親の君、いと忍びて見そめられけるにや、かの女、かき消ち失せぬとて、求めたづねさせ給。二、三日こそあれ、程なくその人とあらはれぬれば、上いとめざましく

憎しとおぼす。やむごとなき際にはあらねど、御覚えの時なれば、きびしく咎めさせ給て、げに須磨の浦へもつかはさまほしきまで思されければども、さすがにて、官みなとゞめて、いみじう勘ぜさせ給へば、かしこまりて、岩倉の山庄にこもりゐぬ。

『増鏡詳解』に、「こは、源氏物語に、光源氏の君、朧月夜の内侍と不義の咎によりて、須磨に流されし事あるによりて、をかしくかけるなり」と注があるように、文脈全体が『源氏物語』を下敷きにしている箇所であるが、その中で「やむごとなき際にはあらねど」と記されているのは注意すべきであろう。

例はさらに遡れる。平安時代後期の『今鏡』にすでに、

いとやむごとなききはにはあらねど、中納言にて御親はおはしけるに、母北の方は、源氏の堀河のおとどの娘におはしけるうへに、　（すべらぎの下、第三　男山）

という例が見られるのである。(注12) 美福門院得子が鳥羽院の寵を受けたことが語られる文脈で、これが桐壺巻冒頭をふまえた文章であることは諸注に指摘があるが、今はこの時代にすでに「あらねど」と記されていることが重要である。『今鏡』の作者は、問題の「が」を逆接の接続助詞として読んだごく初期の読者ということになるであろう。

これらに見られる本文の改変が無意識のうちに起こったものかは明らかにし難いが、アンケートに見受けられたのと同じ現象がここでも起きている可能性は十分考えられるのではなかろうか。少なくとも結果として、桐壺巻の本文が「きはにはあらねど」と加工された上で用いられることが、すでに『今鏡』の時代に行われていたのである。その加工は『増鏡』以下、近世や明治期においても続けられた。

だからと言って、現代において「「あらねど」と習った」と記憶してしまう現象の原因をこれらの資料の影響と考えるのは無論早計に過ぎよう。高等学校で生徒がこれらの文献を目にしたり、明治期の梗概書を紐解いたりする機会はまずないと思われるからである。同様に、古典の逆接表現を網羅的に見渡す機会もやはりないであろうから、「あらねど」の方が自然だと帰納的に意識しているとも考えにくい。あるいは『百人一首』で人口に膾炙した大江千里の一首、「月みれば千々にものこそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」などの影響があるのだろうか。これらの可能性はいずれも、「なぜ「あらねど」と記憶してしまうのか」という問に対する根本

的な解答にはなり得ず、その点は後考を俟つほかない。だが、少なくとも「いとやむごとなききはにはあらぬが」という本文が「あらねど」に改変される事態を十分に誘発する箇所であることは、上述の諸例から明らかであろう。その意味では、現代の現象も決して偶発的なものではなく、あくまでもこれらの例の延長線上にあるように思われてならない。

五

教科書の問題に戻るが、ここで一つ興味深い証言を紹介しておこう。池田弥三郎氏は「谷崎源氏年代記3」（『批評集成　源氏物語』所収）の中で、師の折口信夫を回想して、

この「が」は、訳出するにあたって、世間ではよく間違っている。源氏の註釈書が出たら、まずここの訳をみるといいと、折口先生はよくわれわれに言っておられた。……いわば英語の関係代名詞の用法のようなもので、訳文の流麗さを考えずに、訳すとすると、「……というのではないお方で、その方は……であるお方、があった」ということになる、というように、わたし達は先生の源氏の時間に教えられていた。

と述べている。

この、まさに「世間ではよく間違っている」状況を背景に、戦後の教科書は様々な試行錯誤を試みてきた。その二三を紹介する。石垣氏の『助詞の歴史的研究』の翌年に刊行された『新選国文抄』（清水書院、昭和三十一年）にはすでに、

「いとやむごとなききはにはあらぬが」の文の「が」が格助詞か、接続助詞かについて、考察せよ。

という問題が登場している。昭和三十年代の教科書は、

問　「やむごとなききはにはあらぬが」の「が」を文法的に説明せよ。
（『平安物語文学選』日本文教出版、昭和三十二年）

問　「あらぬが」の「が」はどんなはたらきをしているか。
（『高等学校　古典三』角川書店、昭和三十五年）

の如く次々とここを練習問題化する。本文の脚注にも「同格」の語が見られるようになる。この時期辺りに現在に通ずる練

習問題の原型があるように思われる。

だがその一方で、『源氏物語』（三省堂、昭和三十一年）の「教授用資料」には、

山田孝雄「平安朝文法史」では、格助詞と接続助詞との過渡期にあるものとして、両用に解されることを述べているが、このような場合、ほんとうにたいせつなことは、格助詞か接続助詞かを決定することではなくて、そのいずれに、より多くの重心をかけているかということと、格助詞と接続助詞とは、ある部分でその働きを接触させているものであって、区別のつかない中間的な意味の場合もある、ということである。

という歯切れの悪い説明もある。記述の是非はともかく、格助詞か接続助詞かを答えさせる質問に対してこのように答えたなら、生徒はきっと戸惑った事であろう。

また、この時期の教科書には時折以下のような対訳形式のものが見られる。『高等総合国語　四』（教育図書）には、

非常に高貴な家がらの出というのではないが、

と逆接に解した口語訳が下段に添えられ、訳文の末尾に「潤一郎訳「源氏物語」による」とある。これは、昭和十六年の訳「非常に高貴な家柄の出と云ふのではないが」に拠ったもので、現代仮名遣に改め、漢字を平仮名に直す程度の若干の相違がある。尚、この教科書奥付には昭和二十七年四月五日発行とある。実は前年の昭和二十六年五月には谷崎の『潤一郎新訳源氏物語』が上梓されており、ここでは「格別重い身分ではなくて」と同格の訳に改められているのだが、教科書編集の際におそらくそれを参照する時間はなかったのであろう。

最後に、この頃の状況をよく表す教科書があるので紹介する。昭和三十一年の『詳注源氏物語抄』（日栄社）には、「研究」として設問があり、

「いとやむごとなききはにはあらぬが」を或解釈本には「そんなに貴い身分ではないが」と訳しているが、それで忠実な解釈と言い得るかどうか。

とある。極めて誘導的な作問と言えようが、わざわざ「或解釈本」を設定して逆接の訳を吟味させるところに、当時の実情がよく現れているように思われる。

はたして、その「教授資料」の「解答之部」には、

忠実な解釈とは言えない。その理由は、「やむごとなききはにはあらぬが」の「が」は、主格を示す格助詞であるのに、これを接続助詞として解釈しているからである。むしろ、「ソンナニ貴イ身分デハナイ方デ」とする方がよい。

と記されている。[注13] 当時の教科書には、

「源氏物語」は、日本の古典の中でも第一級の作品である。できれば原文で、無理ならば口語訳ででも全文を読むことに努力してみよう。

（『国語三　高等学校用総合［改訂版］』日本書院、昭和三十二年）

といった記述も見えるが、いざ「口語訳ででも全文を読む」という際に、先に折口が「世間ではよく間違っている」と語った状況はまだ続いていた。当時は逆接に解する「解釈本」がかなりあったのである。

ここに「或解釈本」とあるのは、同じ教科書に掲げられた「注釈書と研究書」のうち、その影響力の大きさと表現の類似から見て、おそらくは島津久基『対訳源氏物語講話』（昭和五年）[注14]の、

そんなに貴い身分といふではないが、

という訳あたりを念頭に置いているのであろう。[注15] 因みに、この教科書には「注釈書と研究書」という案内頁があり、この『講話』には「口語訳・群注がある」といったコメントが付されている。そのほか、「逐語訳だから学生にも向く」と推奨される吉澤義則『全訳王朝文学叢書』（大正十四年）においても、

すぐれた家柄の出ではないが、

と逆接に訳しており、教科書の練習問題で「が」の文法を問うことは、口語訳で『源氏物語』を通読する折の注意を喚起する役割を果たしたことになろう。しかもそれは、当時としては最新の研究成果を反映させた練習問題であった。少なくとも、ほとんどの校注書に「同格の格助詞」と言及される現在の印象とは異なり、一定の新鮮さを持った解釈に映ったの

ではあるまいか。そもそも、戦前の古典教育で『源氏物語』が取り上げられる場合はそのほとんどが須磨巻であった。[注16] 桐壺巻は帝の軟弱が嫌われ、若紫巻は少女を連れ去るという行為が風紀上嫌われたのである。その意味で、桐壺巻が教科書に掲載されること自体、古典教育にとって新しい試みであったと言える。その新しい教科書に登場した「が」の練習問題は、今でこそステレオタイプ化された観があるが、「或解釈本」のような戦前の解釈が色濃く残る当時にあっては実際上も必要なものであり、再出発という時期にふさわしい瑞々しさを持っていたと思われる。

先にも用例紹介の際に少しく触れたが、『紫式部日記』寛弘五年十一月一日の記事に『源氏物語』のことが記されてから来年で千年になるという。今や定番化した「が」の問いかけ、そして「同格の格助詞」という「正解」の応酬であるが、読み継がれてきた千年の解釈を振り返ったとき、本稿でたどったように大半の時代はこれを逆接の意に解し、しばしば「いとやむごとなききはにはあらねど」の如く本文の改変さえ伴って記憶され、書き留められた。同格の「が」として読んだのは物語の成立直後と昭和に入ってからの数十年というほんのわずかな時期に過ぎない。私達は実はその数少ない読者の一人であるのだが、あまりにも定番化した練習問題をめぐる授業風景からその事実を想像するのは難しい。

注

注1　中河督裕・吉村裕美「高等学校の国語教科書は何を扱っているのか。」京都書房、平成十二年。

注2　因みに、同じ第一学習社の国語教科書でも、旧課程の『高等学校　国語二』、あるいは新課程の『高等学校　国語総合』では脚注はほぼ同じ内容でありながら、「が」の設問は挙げられておらず、科目名によっても扱いが若干異なるようである。

注3　他にこの箇所に関連するものとして、橘誠「源氏物語「桐壺」から――「いとやむごとなき際にはあらぬが」の「が」の解釈――」（『国文学』昭和三十四年七月）、後藤克己「桐壺冒頭の文の構造について――助詞「が」の機能を中心として――」（『国文学攷』三十八、昭和四十年十一月）や、佐藤定義「源氏物語ノート――いくつかの問題点の整理――」（『国文学』（昭和三十四年七月）、鈴木良之介「桐壺「いづれの御時にか」など――その現代語訳について・その他――」（『日本文学研究』昭和四十一年十二月）、山田昌裕「助詞「が」の今むかし」（『日本語学』平成十八年十二月）などがある。

注4　その他に、「それほどに高い身分ではない方が、際だって帝の寵愛をお受けになるということがあった。」（『日本語文法大辞典』）のように主語として解するものもあるが、本稿では取り上げない。因みに、外国語訳の状況は、英訳ではアーサー・ウェリーが、

there was among the many gentlemen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very

high rank was favoured far beyond all the rest;

と逆接に訳しているが、後続のサイデンステッカー訳とロイヤル・タイラー訳では同格である。また、二〇〇五年に上海で刊行された『源氏物語図典』には、

有一位更衣出身雖不高貴、却蒙天皇格外寵愛。

と説明される。これは、先行の豊子凱訳（人民文学出版社、一九八〇年）の「其中有一更衣、出身并不十分高貴、却蒙皇上特別寵愛」や、林文月訳の「有一位身分並不十分高貴、却格外得寵的人」（洪範書店有限公司、二〇〇〇年）などの逆接の解釈に由来するものと思われる。

注5　同じく池田亀鑑氏執筆の『日本文学大辞典』（新潮社、昭和七年）に見られる梗概にも、「身分は余り高くはないけれど」とある。

注6　教科書の世界でも、大修館書店の教科書『新編国語総合』所載の「『源氏物語』へのいざない」では、この橋本治訳（「そう上等という身分ではないが」）と、同格に解する谷崎潤一郎訳（「たいして重い身分ではなくて」）とを特に説明のないままに並記している。また、世羅博昭『「源氏物語」学習指導の探究』（渓水社、平成元年）は、「授業試案」として、「同格の助詞」の説明を盛り込みながら、一方で「身分が高くないのに、帝の寵愛を一身に受ける女主人公。何かが起こりそうな状況を読みとらせる」と説明している。尚、本書は「助詞「の」」と記すが、「助詞「が」」の誤りであろう。

注7　本書の須磨巻が戦前期の教科書『現代国語読本』（昭和九年）に採用されていることを一色恵里『「源氏物語」教材化の調査研究』（渓水社、平成十三年）が指摘している。

注8　『近世文芸叢書　五』所収。

注9　『珍書刊行会叢書　五』所収。京都女子大学蔵本の複写を併せて参照した。

注10　『荒木田麗女物語集成』（桜楓社、昭和五十七年）による。

注11　さらには、近世期の『長恨歌伝』注釈に見られる、

楊貴妃ハ本后（ホンキサキ）ナラネドモ昼（ヒル）ハ終日酒宴舞楽（ネモスシユエンブガク）ニテクラシ夜ハ夜モスカラ専ラニス。玄宗貴妃ヲ寵愛（テウアイ）アルコト不レ斜（スナメナラ）

（『歌行詩諺解』長恨歌伝（貞享元年刊））

などについても、桐壺巻冒頭を意識した文章と言えるのではないかと思う。「本后（ホンキサキ）ナラネドモ」という表現はそれを想像させる。

注12　蓬左文庫本は「あらねども」に作る。

注13　教科書の記述は主格と同格が混在しているように見えるが、石垣氏自身も同格の用法を「主格形式第二類の一変形」であるとしている。例えば現在でも小学館の「新編日本古典文学全集」は、訳は「最高の身分とはいえぬお方で」としながら頭注には「「が」は主格助詞」と記しており、この点は当時と変わらない。

注14　引用は、昭和十八年の訂正十一版による。

注15　ただし、この口語訳については、

こゝで一寸語法に関して注意しておくが、

いとやんごとなき……時めき給ふありけり。（本文）

口訳には「そんなに貴い身分といふではないが……」としておいたが、「際にはあらぬが」の「が」は「けれども」の意味ではない。主格を示す「が」である。そして「勝れて……ありけり」が、その述語の形をなしてゐる。

という断り書きがあることは注意しておかねばならない。口語訳と文法的解釈の分裂は承知の上だとする記述である。

注16　前掲、一色恵里『『源氏物語』教材化の調査研究』（渓水社、平成十三年）。

（付記）
本稿で述べた内容の骨子は、筑紫日本語研究会（第二百十六回、平成十九年十月二十日）において発表した。席上、御指教賜った諸先生方に深謝申し上げる。また、本稿で引用した教科書の多くは、福岡教育大学附属図書館「戦前・戦後教科書室」所蔵の資料を用いた。調査の便を図って下さった関係各位に厚く御礼申し上げる。

（たむら　たかし・本学専門研究員）